

前期40週間の増体重はA区357.6 kg, B区349.2 kgで、1日当り増体重(DG)はA区0.7 kg, B区0.69 kgで目標値の0.7 kgにはほぼ一致した。後期32週間の増体ペースはほぼ一

定に推移し全期間の1日当り増体重はA区0.71kg, B区0.69kgとなり, A区の方がやや上回る成績を示した。

(2) 飼料摂取量と要求率(表2)

濃厚飼料摂取量は16週以降漸増し1日1頭当りでは56~72週間の間で最も多い。また, 平均体重比でみると8~24週間の間で最も多く2.2~2.3%摂取した。以降は漸減し, 前期, 後期ともにB区の方が多かった。

粗飼料摂取率は前期A区27.0%に対しB区18.1%で後期A区20.2%に対しB区14.6%となりいずれもA区の方が多かった。

TDN要求率は前期A区6.35, B区6.47で後期A区8.81, B区8.89となり, 前期が後期に比し優り, A区がB区に比し優った。

(3) 発育状況

主要部位の発育状況は試験開始時において, 体高及び体重がB区の方がやや優っていたが終了時には主要部位の発育指数及び肥育度ともにA区の方が優る結果になった。

(4) 健康状態

前期32週時頃より時々陰毛に結石付着が見られたが尿石症の発生はなく健康状態はおおむね良好であった。

と殺の内臓所見では両区ともに第一胃の絨毛欠損並びに第四胃の潰瘍及び充出血等が認められA区の一部には膀胱炎及び軽度の膀胱内結石が認められた。

(5) と殺解体成績及び枝肉審査結果

試験終了後は絶食(40時間)してと殺解体したが, 終了時体重とと殺前体重の差はA区27.6kg(4.5%減)に対してB区33.2kg(5.4%減)でA区の減少率が少なかった。

枝肉歩留りはA区65.4%, B区65.9%で両区とも良好であった。均称, 肉付き, 脂肪付着は両区ともおおむね良好であったがB区の一部に肉付きのやや薄いものがみられた。

肉の色沢, 肉のきめ, しまりはA区は良好であったが, B区は個体間にばらつきがみられ一部に肉色の淡いもの及び肉のしまりに難のあるものが認められた。

脂肪交雑は両区ともやや少なく, A区2.2, B区2.5であった。ロース芯面積は両区とも大きくA区52.7cm², B区52.5cm²と良好であった。

(6) 収益性については良質粗飼料給与区(A区)の方が

稲わら給与区(B区)に比し肉牛売上高が1頭当り33,510円(4.4%)上廻り更に濃厚飼料が317.9kg(8.8%)節約されたことにより1頭当りの利潤は約2倍の53,000円に増加する結果が試算された。

(7) 以上の結果から濃厚飼料節減のため粗飼料の併用が経営上有利と思われるが特に稲わらの単味給与は期別の増体重にばらつき等の傾向がみられるので牧乾草やサイレージ等との併用を行うとともに前期増体重の抑制期における1日当り増体重の目標値を0.75kg~0.70kgにおくことが望ましい。

また素牛の個体により産肉能力が異なるため肥育牛の出荷時期等について適宜判定する必要がある。

4 要 約

和牛に対して前期40週間にぬか類を多用した低カロリー飼料を給与した肥育法について検討したところ次のとおりであった。

(1) 1日当り増体重は前期40週間について両区とも目標値の0.7kgにほぼ一致した。

後期32週間の増体ペースはほぼ一定に推移し全期間では大型仕上げの目標値(620kg)にほぼ近い結果を得た。

(2) 濃厚飼料摂取量は16週以降漸増し1日1頭当りの摂取量は56~72週間の間で最も多く, 平均体重比はA区1.7%, B区1.9%とA区の方が少なかった。

(3) 粗飼料摂取量はA区が比較的多く摂取したのに対しB区の稲わらの摂取量は24~40週間を除き少なかった。

(4) 濃厚飼料の要求率は後期に両区ともに高くなり, 特にB区の方が高かった。

(5) 枝肉成績は均称, 肉付き, 脂肪の色沢と質及びロース芯面積等については両区ともおおむね良好であったがB区の一部に肉色の淡いもの及び肉のしまりにやや難のあるものが認められた。

引 用 文 献

- 1) 阿部文也・工藤昌司・大築光吉. 和牛の低カロリー飼料給与による肥育試験. 東北農業研究 29, 137 - 138 (1981).